

日米協会にお入りになりませんか？

日本で一番古い日米交流団体の足跡をたどる

久野 明子

聞き手：佐多保彦 株式会社東横買 代表取締役社長



佐多：今日は日米協会を大いにPRしていただくこと、専務理事の久野さんにお出でいただきました。協会について思い切りお話をなさってください。

久野：日米協会は、1917年、日本の政財界のリーダーが、日米両国の友好を深め相互理解を促進するために在日アメリカ人と協力して設立した、日本初の民間レベルでの日米交流団体です。日米民間交流を80年以上やってきたことになりました。創立時の1917年は第一次世界大戦のさなかですが、日露戦争(1904-05)に勝った日本が中国大陸に進出して、大陸での利権をめぐるアメリカとの関係が悪化しつつあった時期ですね。国内で両国間の空気が険悪になってきたこともあり、明治時代にアメリカに留学した人たちが中心となって交流団体を作ろうということになったのです。

佐多：久野さんは、この歴史と伝統のある日米協会で、女性初の専務理事になられて5年だそうですね。

久野：歴代会長の写真が並んでいる古い専務理事室に初めて入ったときはとても威圧感を感じました。変な女性が入ってきたと睨まれているような。その協会の歴史と伝統を活かしなが、新しい時代のニーズにどのように応えていくかが一番難しい課題です。今まで通りやるのが一番簡単ですが、日本の社会も日米関係も大きく変貌しています。そういう変化に協会がどういふふうに対応してプログラムを作っていくか、そればかり考えています。

現在、プログラムでは、各界で活躍中の方を講師に招いての月例昼食会、若い世代を対象とした交流プログラム、日米関係をテーマとした公開シンポジウム、会員間の親睦をはかるための集いなどが中心です。

創設者で初代会長を務めた金子堅太郎は、日本人で初めてハーバード大学を卒業して、伊藤博文内閣で明治憲法を起草した人^(注1)。その後は、吉田茂、岸信介、福田赳夫などの総理大臣経験者も会長を務め、現在は元駐米大使の大河原良雄です。

今と違って、明治、大正の時代にアメリカに

留学したり日米関係に関連のある人といえ、各分野でもトップクラスの人たちに限られていましたからね。沢尻栄一^(注2)、高峰譲吉^(注3)なども関わっておられました。

佐多：久野さんは明治政府の陸軍大臣大山巖と、日本女性で初めてアメリカに留学した大山捨松^(注4)の曾孫と伺っています。その久野さんがやはりアメリカに留学をされ、今こうして日米親善に一役買っているのはやはりご縁ですね。久野さんの著書『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松』(中公文庫)には、捨松の留学生活とともに日本の開国の様子が生き生きと描かれていて、たいへんおもしろく読ませていただきました。

久野：捨松は、1871(明治4)年、岩倉使節団の一員として津田梅子^(注5)たちと共にアメリカに渡って、12歳からの10年間を向こうで過ごし、日本人女性で初めてアメリカの大学を卒業しました。また、日米協会の初代会長、金子堅太郎も捨松と同じ船でアメリカに渡っているのです。何十年か後にその同じ協会が私が仕事をさせていただくことには運命的なものを感じます。

佐多：その頃から現在まで日米関係も様々な変化を遂げてきましたが、民間レベルでの意識の変化も大きいですね。

久野：これからの日米協会の活動にとって一つの不安要素でもあるのですが、特に若い人たちの間でアメリカ離れみたいなものが起きているような気がします。私たちの時代はアメリカと戦争をして負けて、占領時代があって、アメリカのようになりたいという憧れがあったわけですね。好き嫌いは別として常にアメリカというもの自身が身近にありました。それが高度経済成長によって物質的には世界の大国となった日本で、今の若い人にとってアメリカは特別なものではなくなくなってしまったようです。連休には、ぱつとハワイだ、ラスベガスだと出かけていき、意識的にアメリカだ、日米関係だと構えなくてもよくなった。これはよいことではあるんですが、逆に無関心ということにもなります。この辺をきちんと捉えていかないとい、これからの民間の日米交流は非常に難しいと思いますね。

佐多：戦争はよくありませんが、日米間でジャパン・パッシングだ、貿易摩擦だやっていると一生懸命お互いを理解しようとするわけですね。それにしても、昔から一部の人たちを除いて、アメリカ人の日本に対する無関心にはひどいものがあります。私は20年以上日米高校生の短期交換留学プログラムで、毎年日米一人ずつ応援しているのですが、そのきっかけが、たまたま頼まれてカリフォルニアの中学校で話をする機会を得たことでした。そのとき黒板に持参した世界地図を貼ったら、12,3歳の女の子が元氣よく手を挙げて最初に質問したのは、「日本はどこ？」でした。ふつうのアメリカの子供たちは全く日本を知らないし、関心ももっていないことを知って、草の根運動で少しでも日米交流のお役に立てればと今でも応援しているのです。

久野：本年5月小淵総理が訪米した際、シカゴの日米協会で総理を招いてディナーパーティーを開いたので、私も東京の日米協会を代表して行ってきました。そのときふと気になって、総理の訪米を伝えるニュースが現地でのどのくらいあるのかとインターネットで調べましたら、ニューヨーク・タイムズの元日本特派員だった人の記事が一つだけ見つかりました。日本の総理の訪米は、アメリカのマスコミにとってニュースバリューはないのですね。

パリやイタリアのファッションだ、中国やタイの料理だと、日本人ほど外国に興味をもっている国民はないと思うのですが、アメリカは自分の国が広いせいか、ニューヨークに行ったことのない人が山ほどいます。だから、決してインターナショナルじゃないんですね。自分たちが中心だと思っているから、外国に目を向ける必要もないと。

佐多：日本の英語教育論というものも、ときどき思い出したように議論されます。確かに、10年以上英語を勉強して日常の会話にも不自由するというのは本当に困ったことですね。突飛な考えかもしれませんが、これは日本を村社会にしておこうという国策なのではないかと動くりたくります。国民がみんな英語をよく理解したりしゃべれるようになったら、あまりにも多く

久野 明子 / くの・あきこ

1940年、東京生まれ。'64年慶應義塾大学文学部西洋史学科卒業。在学中、夏期交換留学生としてスタンフォード大学に留学。のちにホープ・カレッジ及びミシガン大学で学ぶ。'64年東京オリンピック組織委員会渉外部勤務。'68-'71年アメリカ・オハイオ州東京貿易事務所代表。'79年CWAJ(カレッジ・ウィメンズ・アソシエーション・オブ・ジャパン)に入会、日本人及び外国人女子留学生の奨学金支給のための活動を行う。'85年CWAJ会長。現在、社団法人日米協会専務理事。



の面で海外と落差があることに気づいて、日本の政府がやりにくくなるし、意欲があって独立心の強い人はみな日本から出ていってしまうからじゃないかと。

久野: 大胆なご意見ですね(笑)。誰も彼もが英語をしゃべらなくてはとは思いませんが、必要な人にはしっかり勉強していただきたいですね。私はアメリカの大学で1年勉強したあと、ミシガン大学のEnglish Language Instituteで、外国人に英語を教えるための教授法のコースをみっちり3カ月間受けました。なぜ日本人は英語ができないのかを知りたかったんですね。そこには有名なミシガン・メソッドというシステムがあって、その通りに教えればベーシックなことは全部しゃべれるように作られています。

ですが、日本人の場合、英語ができないという以前に、自分の意見を伝えるのが下手なんじゃないかと思うんです。日本は自己主張があまり歓迎されない国ですから。私もアメリカでだんだん英語に慣れて耳に入ってくるようになった頃、私は英語ができないんじゃないかと、言うべき自分の意見がないんじゃないかということに気づいてショックを受けました。

佐多: 英語もさることながら、日本はもっと真剣に教育システム全体を改善していく努力をしないと、これからの国際社会でますます取り残されてしまいますね。

では、ちょっと日米協会に話を戻しまして、私が一番記憶に残っているのは、協会からご案内をいただいて、終戦50周年の1995年に戦没者追悼の硫黄島ツアーに参加したことです。

久野: あれは、'95年3月14日でしたわ。硫黄島は太平洋戦争最大の激戦地で、摺鉢山の頂上に米国海兵隊の顕彰碑が立っていますが、それは戦後当然アメリカの管理下にありました。ところが'68年に小笠原諸島が日本に返還されるとき、今後は誰が管理するのが問題となり、それで外務省を通じて日米協会に打診があって、私たちの協会が管理することになりました。当時の日米協会の岸会長なども関わって、そのとりに日本兵の顕彰碑も立てました。佐多さんの行かれたツアーは、アメリカ側からの呼びかけで、

遺族・関係者が600人で出かけるので、日本側からも参加しないかと誘われ、メンバーの方々にご案内したものです。日本からは、輸送手段の関係で、遺族の方も含めて約100名の方しか参加できませんでした。

佐多: 彼はほとんど遺族の方でしたが、日本の本土を守るために19,000の日本兵が犠牲になったこの島を見ておきたいという気持ちがあって、勇気を出して参加しました。アメリカはチャーターしたジェット機6機でやってきて、日本側は自衛隊の輸送機が3機、1機はプレス用でした。日本人がみな喪服なのに対して、アメリカ人はアロハシャツなど普段着のまま、たいへんな国民性の違いを感じました。モンテール駐日大使が出席されましたが、日本からは外務大臣代理として北米局審議官。せめて外務大臣ご自身に来ていただき、日米戦死者への鎮魂と世界に向けての平和のメッセージなど出してほしかったと思ったものです。

久野: 私は、'97年、日米協会創立80周年記念の晩餐会に、天皇、皇后両陛下の出席を賜ったことが記憶に鮮明に残っています。戦前からの地道な努力が認められたのだらうと思って感無量でした。また昨年は、初めて日米両国の日米協会が一堂に会して、福岡で国際シンポジウムを開催しました。日本から27、アメリカから36の協会が集まって、今後の協会の発展のために日米間で何ができるかを模索する会議が開かれました。政治家、学者などを招いてフォーラム、パネルディスカッションも行われ、2日間で2,000人の方が参加されましたが、こういう会を経験するとますます日米関係の重要性を実感します。

佐多: 月例昼食会でのゲスト・スピーカーとメンバーのQ&Aも魅力ですね。メンバーの方々が英会話のレベルを気にせず積極的に意見交換をなさっています。特に、厳しいご意見でもユーモアのセンスにたけた方々の意見には感心させられますし、たいへん勉強になります。昼食をとりながらのメンバー同士の交流も盛んです。

久野: 日本人のビジネスマンは、大部分の人が

ビジネスにしか関心がないと言われてますね。仕事以外の話はゴルフだけだと。外国人には話題の豊富な人も多く、社会を論じ、文化や歴史を語るのを本当に楽しんでいます。外国がよくて日本が悪いというのではないですけど。そういう成熟したおつき合いを通して、日米親交が促進されるようお手伝いできればいいですね。今一番の悩みは、若い会員が少ないことです。会全体の高齢化が進んでいます。つい最近、ジュニア・メンバーシップを作りまして、20歳から30歳までの方には半額の年会費で入っていただけるようにしました。お医者様やナースなど医療関係の方のメンバーも多くありません。大歓迎です。ご関心のある方は、是非協会の事務局までご連絡ください。

2001年はサンフランシスコ平和条約^(注5)が調印されて50周年にあたります。サンフランシスコの日米協会ではいろいろな行事を計画していますので、会員の皆さんにも是非サンフランシスコまでいらしていただきたいと思います。

注1: その後、貴族院議員、農商務大臣、司法大臣などを歴任する。枢密顧問官、伯爵。日本法律学校(後の日本大学)設置発起人、初代校長。(1853-1942)

注2: 実業家。国立第一銀行をはじめ多くの企業の設立に関与、財界の大御所として活躍。社会事業と教育にも尽力。(1840-1931)

注3: 薬学者・化学者。理化学研究所の創設に尽力。(1854-1922)

注4: 渡米時8歳。帰国後、教職を経て、女子英学塾、後の津田塾大学を設立。(1864-1929)

注5: 1951年9月8日オペラ・ハウスにて調印式。日本と連合国が、第二次世界大戦の終結と国交の回復を正式に取り決めた条約。翌年の発効により、日本が主権を回復し、国際社会に復帰した。

社団法人 日米協会

(The America-Japan Society, Inc.)

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-17-14

Tel: 03-3593-6617 Fax: 03-3593-6675

肌のぬくもりが親子関係を育む

カンガルー・ケア

堀内 勁

カンガルー・ケアという言葉がある。未熟児を保育器から出して、お母さん、お父さんの胸で直接肌を触れさせていると、赤ちゃんの体温は一定に保たれ、呼吸も規則正しくなる。この方法がカンガルーの子育てに似ているため「カンガルー・ケア」と呼ばれている。カンガルー・ケア自体は、新生児集中治療において未熟児を対象にしたものだが、その後の親子関係などを含む様々な人間の問題に関連があることがわかってきた。

聖マリアナ医科大学横浜西部病院周産期センター長、堀内勁医師は、日本で初めてのカンガルー・ケアに注目し、自らの働く施設にこれを導入して積極的に取り組んでいる。今回は、『サイレント・ベイビーからの警告』（徳間書店）、『カンガルー・ケア』（メディカ出版）などの著書もある同医師を病院に訪ね、お話をうかがった。

カンガルー・ケアの起源

母親が自分で出産し、乳房で包んで温め、おっぱいを与えて育てるということは、ごく自然な営みで、今でもアフリカの奥地などでは当然のように行われているわけですね。

原点はそこにあります。これを現代の医療に結びつけたのは、南米コロンビア、ボゴタの小児科医たちで、20年ほど前のことです。彼らは病院が貧しく保育器が買えなかったので1つの保育器に2-3人の未熟児を収容したため、交差感染が起こって多くの赤ちゃんが死んでしまった。そこで窮余の策として母親の乳房の間に赤ちゃんを抱かせると、これが非常にいい。慣れたら家に帰し、お母さん、お母さんが疲れたらお父さん、おばあちゃん、と24時間胸の中に入れてあげる方法で、未熟児の救命率を大きく改善しました。カンガルー・ケアというのはこうして未熟児の在宅医療から始まったんです。また彼らの場合、病院でせっかく助けてあげても、家に帰ると貧しい、親の愛着も育っていないから次の日には捨てられてしまう、といった問題もあったが、それも母子の絆が強まったことで著しく減少しました。

日本での取り組み

ボゴタの報告に最初に注目したのがヨーロッパで、それからアメリカのグループが研究プロジェクトを作って本格的に始めたそうですが、先生がこれに注目するようになったきっかけは？

ヨーロッパは、日本と同じ母子分離ですから、それがその後の親子関係に大きな影響を与えるという報告に驚いてさっそく始めました。私は、アメリカ・チームの論文がプロジェクト・アフリカとして出されたのをたまたま読んで興味をもちました。新生児の集中治療というのは、命を助けるために親子の間を引き裂くこと。人生80年の今日、その最初のほんの短い期間ではあるが、妊娠して赤ちゃんが生まれて親子になっていくプロセスは非常に複雑です。それを保育器を使った集中治療だけで過ごして本当に大丈夫なのだろうか、という疑問がもともとありました。

そこで、うちの連中に「こんなのがあるよ」と話すと、これは意味がありそうだとみんな言う。5年ほど前です。手当たり次第文献を集め、翻訳をして、勉強会を開き、やれそうだという共通の意識が出来上がった。ただ現実問題として、これまで保育器に入れてきた赤ちゃんを、ばい菌だらけのお母さんの胸に、と考えると簡単に踏み切れない。たまたまNICUの看護婦さんだった方がお母さんになって、やってみますと言ってくれました。我々はお母さんの変化、子供の変化を息を潜めて見ていたが、両方ともものすごい勢いで様子が変わっていく。たまたまうちの施設が日本で最初にやることになったので、本当に安全なのが、効果があるのかなどを見極めなくてはいけない。それで医師、看護婦、臨床心理士でチームを作り、みんなで分担しながら同じものを見ていき、医学的、生理学的効果を探っていきました。

カンガルー・ケアの意味

私たちは、テレビや写真で、信じられないような小さな赤ちゃんが、進歩した医療技術によって助けられるのを目にしているので、今は未熟児でも大丈夫くらいに考えてしまいます。



堀内 勁 / ほりうち・たけし

1943年東京生まれ。慶応義塾大学医学部卒。同大学医学部小児科学教室助手、総合病院太田病院小児科勤務を経て、聖マリアナ医科大学小児科学教室講師を経て、現在同大学横浜市西部病院周産期センター・センター長並びに小児科学教室教授。専門は新生児集中治療、新生児神経学、乳幼児の発達、周産期の母子関係。

産んだ子が未熟児だったときのお母さんの挫折感には想像をはるかに超えるものがあります。妊娠をしてお母さんはお腹の中で赤ちゃんを育てながら想像します。愛する男性の血をひいた、ふくらんでかわいい自分赤ちゃんと。ところが今は23-24週で生まれてきても人工呼吸器を使って助けることができる。となるとすぐに集中治療室に連れていかれ、お母さんが面会にきて電極と区別がつかない小さい赤ちゃんと対面して、これが私の子なの？10カ月お腹で育ててかわいい子を産むのが女性としての最大の機能だとすると、自分は妊娠に失敗したと思ってしまう。

その上、我が子があったときにあまりに痛々しく、この子はこの瞬間にも死んでしまうのでは、という死のイメージを描く。そして、どうせ死ぬのなら愛してはいけないと無意識に思う。自分の子を直視できないお母さんがたくさんいます。触ってあげなさいと言われても、肌のぬくもりが伝わって生きていることがわかってしまったら、その後死んでしまったときに自分の気持ちはどうなるの。それはたいへんなストレスです。しかも、保育器の中で人工呼吸器につながれ、親のやるべきことはみんな看護婦さんや医師がやっている。自分では何もできないうちに小さい赤ちゃんが育っていく。そうして退院を迎えます。

その後の親子関係に影響が出そうですね。

母親側の問題としては、家に帰ってもお母さんはまだ子供の扱いになれていない。効率第一で動く病院と同じようなやり方で子供に接する。自分の気持ちを素直に表出できないまま技術だけが先行していく。いつ死ぬかわからないという思いもまだ引きずっている。一対一のつながりの上に成り立つ、子育てという人間関係が一番大切なプロセスをうまく始めることができま



カンガルー・ケア中の観察

せん。

子供側の問題としては、新生児集中治療では、子供を助けるために、気管内挿管でチューブを入れたり、針を刺したりと子供を痛めます。子供たちにとっては、何もわからないうちから絶えず痛みを与えられるので、中には痛みを抑制する神経系が動き始める子がいる。お母さんたちが気づくのは、予防接種に連れていって針を刺されても泣かないとき。あ、うちの子は強い。そうじゃないんですね。抑制する働きが出ている。そういう子は外に遊びにいった大怪我をして、痛みを抑制してしまうのでそれを表すことができない。

カンガルー・ケアの実際

そこでボゴタと違い保育器は揃っている日本でも、カンガルー・ケアが必要になってくるわけですね。先生の病院では、実際どのような方法が取られているのですか。

安全性の点から見ると、修正週数(注7)で32週くらいに人工換気をする子供が急激に減ります。また、もう一つは子供たちの反応が変わっていくのもそのあたりなので、32週を始める目安にしています。保育器が前提で、抱いてもらう時間は1日2時間。子供の状態が悪いなどしてできない他のお母さんを傷つけてはいけないので、時間帯は面会時間前の2時間に限定しています。前開きの服で、ブラジャーははずしてもらい、赤ちゃんを抱っこしていただく。ただそれだけです。お母さんたちはその前に服を着たまま抱いたりしているの、初めはそれとどう違うの?と思うらしいが、実際抱いてみると、我が子の肌のぬくもり、心臓の鼓動、もそもそと動いているなど、これが全く違う。生理的微笑といって、赤ちゃんが眠っている間にニコッと笑う。そのうちお母さんも引き込まれるように寝てしまう。引き込み現象といって、ホテルがびかーと光り出すと、最初はばらばらだったのが、クリスマスツリーのように同調して光るようになる、あの現象ですね。子供の姿に引き込まれて初めて親しくなっていくというプロセスがある。それがまさに目の前で起きるんです。あるお母さんは、早産でいなくなっちゃった子供がもう一度お腹の中に戻ってきたみたい、と表現し



パパ・カンガルー

ました。こうして親子関係の第一歩が始まるわけです。

退院後の調査のようなものは?

大きな調査はやっていませんが、退院後6か月の時点で郵送による調査をやってみました。入院中からお母さんたちに気持ちの変化をノートに書いてもらっているが、退院してからの子供の状態、睡眠・授乳時間、感想などを書いてもらう。カンガルー・ケアをやらなかったお母さんは、育児書に書いてあるような言葉を並べてくる。感想も短い。ところがカンガルー・ケアのお母さんは自分の言葉で書いてきます。その長い感想文からは、子供に対する親近感、愛情が本当に深いことがわかります。カンガルー・ケアで様々な経験をしてきましたから、我が子の存在そのものを認めて、自分の気持ちも素直に出せるんですね。

あとは、周産期センターが、退院していったお母さん方の中心的な基地になることができると考えていて、実家機能と呼んでいます。子供がこんなに大きくなりました、と病院に戻ってくる。小さく生まれた子はここには多いが、一歩外に出れば非常に少ない。育児書にも書いてない、戸惑いながら育児をするお母さんたちが、体験を分かち合うためにこの実家に集まってくるんです。

すべての人間関係の第一歩

先生の著書『サイレント・ベイビーからの警告』には、近年「もの静かな赤ちゃん」が増えていることが指摘されています。世間を騒がせている青少年の犯罪との関連性なども考察されていますが、

この本はちょっと脅かすような書き方になっています。僕たちがこうしたものを書いたりすると誤解されることが多いんですが、乳幼児にスキンシップが足りなかったらこういうことが起きるよ、カンガルー・ケアをしなかったから全部駄目とそういうことではないんですね。人間は、これをしないとおかしくなるというような、そんなやわなものではない。それを戻す力も非常に強い。飛行機の操縦席でも、1カ所が



ママ・カンガルー

断線してもそれを戻す仕組みがあって、非常に複雑に出来上がっている。人間が育っていくというのもそういうこと。そういう取り戻す力があるから人間は素晴らしい存在なんですね。ただそれを最初の出発点でやってあげれば、よい方向に育つ可能性が高い。

確かに今の世の中全体的に人間関係を築き上げるのがきつちよになっていますね。昔に比べて、社会現象が複雑になっているから、そういう修正していくプロセスにも障害が多いことは確か。関係性障害ですね。小学生、中学生、大人社会もみんなそうでしょう。ところが関係性の最初にあるものはやはり親子の関係なんですね。思春期や大人になってから出てくる心の病は乳幼児期に問題があることが多い。

よい親子関係を築くにはスキンシップが一つの鍵になるようですが、これからも働くお母さんが増え続け、なかなか子供との時間がもてなくなるのでは、

時間の長さじゃない。専業主婦でずっと家にも、集まってお母さんたちだけでしゃべってばかりいたのでは意味がない。今育児支援と盛んに言われているが、お母さんたちを外に引っぱり出して育児を外注でやらせようというのはちょっと違うんじゃないでしょうか。外でやってもいいが、お母さんと赤ちゃんが一緒にいる時間をもっと大切にしましょう。一対一という育児に対し、保育というのは複数対複数。子供が人間らしく育つにはこの一対一の関係がいかに大事かということです。長さではなく、中味の濃いが、素晴らしい時間をもつことが必要なんですね。単に保育園を作るだけではなく、その辺をしっかり認識していなくてはならない。この年になると、医者として今まで何をしてきたか、学問的に何をやってきたかを考えます。それでも一番ほっとしているのは、子供を育て上げたこと。その方がはるかに達成感が強い。女性ならなおさらでしょう。今人生には、結婚しない選択、結婚しても子供がいない場合、自分自身の達成感、社会の中での達成感といろいろあります。育児という達成感も大事にしたいですけどね。

(注) 妊娠予定日から生まれた子の週数を補正したものを。

(株)東機翼創立45周年記念シンポジウム・ヴィタリテ

マチウ・リカル師の講演を聞いて

横田 浩史



横田 浩史 / まきた・こうし

1957年生まれ。1981年東京医科歯科大学医学部卒業。1988年ロンドンのクリニカルリサーチセンターにてDr. John Nunnのもとで研究に従事。東京医科歯科大学医学部麻酔蘇生学講座講師、助教授を経て、1999年4月より同教授。

1999年5月22日、新評論発行の図書『僧侶と哲学者』の著者であるマチウ・リカル師を囲んでのシンポジウム「自分と世界(action on oneself and action on the world)」を聞く機会に恵まれた。その本は現代フランスを代表する哲学者ジャン＝フランソワ・ルヴェル氏との共著である。書の話題は、神経生理学、心理学、ギリシャ哲学、宇宙、量子論、認識科学から精神分析まで、多岐にわたって二人の知識人が討論する形となっている。しかし、本書の論鋒はただひとつ、現代において人生の意味をどこに求めるか、に他ならない。リカル師はルヴェル氏の息子で、国際的に有名なパストゥール研究所においてノーベル医学賞受賞者フランソワ・ジャコブ教授の指導のもとに理学博士号を取り、前途洋々の分子生物学者の道を進んでいたのに、突然方向転換して、チベット仏教の修行に向かい、ダライ・ラマの弟子となり、ヒマラヤで既に27年という

異色の経歴の持ち主である。

リカル師の講演のあと2時間におよぶパネルディスカッションが開かれた。宗教学の廣澤隆之氏の名司会によって、天文学の海部宣男氏、免疫学の多田富雄氏、生命科学の中村桂子氏、ロボット工学の森政弘氏、仏教学の横山統一氏というそれぞれの専門分野では当代一流の先生方がそれぞれの立場から、人生の意味、宗教などについて意見を述べられ、リカル師のコメントをまじえながら討論が繰り広げられた。

講演とパネルディスカッションにおいてリカル師が強調されていたのは、人生の意味(meaning of life)をどこに求めるかである。師の言葉を拝借すれば、人生の意味は幸福の追求(quest of happiness)にあり、その幸福(happiness)は深い達成感(deep sense of fulfillment)によってのみ得られる。この深い達成感あるいは充実感、利他主義に基づいた行動すなわち他人の苦惱(suffering of others)を癒す行動によって得られる。利己主義を解消し、平穏な親切心を獲得することの重要性を語られ深い感銘を受けた。



講演中のマチウ・リカル師



パネル・ディスカッション (慶應義塾大学三田校舎北新館ホール)



さて、チベットに修行にいて悟りを開くことができない私のような凡人は、人生の意味を自分の仕事である麻酔に当てはめて行動するしかない。麻酔科学を通して他人の幸福をできる限り手助けすることが自分の使命であって、この視点を忘れてはならないと強く感じた。医師という職業が、まさに他人の苦悩を癒す職業であることは幸運である。しかし、どんな小さな点においても患者さんの立場に立って診療しているかどうかを常に反省しなければ十分とは言えないと感じた。大学にいる者としては、学生や研修医の教育、臨床、研究のいずれにおいても(あるいはどれか一つでもよいから)この深い達成感を味わいたいと願っている。教育によっていい医者を世の中に送り出せればより多くの人を助けられるだろうし、研究も臨床と結びついたら大きな成果となる。しかし教育はとてつもなく難しい。どのように講義をしたら学生が興味を持って勉強に励んでくれるかと考えても、実効は上がらないし、学生をひきつけるパーソナリティもないとあっては、ともかく一生懸命にやるしかない。臨床では、できる限り患者さんに親切に接し、麻酔中はもちろんのこと術後の合併症も起こさないように、また術後の痛みもできるだけ少なくなるようにと麻酔をかけているものの、患者さんを100%満足させているとはまだまだ言い難い。研究は自己満足に終わることが多く、患者さんに福音をもたらしたものは皆無に近い。それでも自分自身が日々の臨床、教育、研究において、利己主義を捨て利他的に行動するとはどういうことかを考え、利他主義に基づいた行動をするための精神力を高めなければならないと感じている。

リカール師は著書の中で、「人は認識、つまり精神的完成とも呼べるもののなかから、知恵や、完全な充足、心の静寂を得ることができると思います。」「私たちは朝から晩まで、生活のどの時間でも自分の精神を相手にしているので、この精神をほんの少しでも変えるなら、私たちの人生の流れも、私たちの世界観も、大きな影響を受ける。」「しかし、三十年生きようと、百年生きようと、人生の質の問題は同じままである。質の高い人生を送る唯一の方法は、内面的に人生に意味を与えることだ。そして、内面的に人生に意味を与える唯一の方法は、私たちの精神を知り、変えるこ

とだ。」と、精神を高める意義を強調している。そしてその精神に基づいて行動することが他人に幸福を与えるのだろう。書の最後にある「仏陀がしばしば語っているように、“道は自分で歩かねばならない”。そうすれば、いつの日か、ことづてを運ぶ者自身がことづてになる。」という言葉は、まさにその道を歩いている人から溢れ出た言葉であり感動的である。

本誌読者の方々には、それぞれの道を探るために日々研鑽し、すでにこのdeep sense of fulfillment を得られていることと推察いたしますが、興味のある方には一読をお勧めしたい。



懇親会会場にて(同大旧図書館大会議室)

出会い(11)

(続)東西文化の狭間

奥村 一郎



4. 歌を忘れたカナリア

当時の修道院では、院長の修道名の記念日には、修道院あげて祝う習慣があった。そのときには、誰かが詩をささげることになっていた。それも、通常、新米の修道者がその役割。そこで、入会したばかりの私にその役がまわってきた。それにしても、まだ、フランスに来て間もない私には、とてもできることではなかった。日本語の詩でさえも、まともに書いたことはない。まして、フランス語となったら全くお手上げ。しかし、修道院生活で一番大切なのは、長上への絶対従順だと聞かされたばかり。はたと困った。しかし逃げるわけにもいかない。ところで、幸いに、私のような初心者には、「守護の天使」と呼ばれるアシスタントが付くことになっていた。若い神父で詩人でもあり、貴重な助け船になった。それにしても、選手交替というわけではない。何かアイデアをだすのは私。また、そこで、ストップ？受洗後まだ二年ちょっとの新信者でしかない私の頭からは、やっと、日本式の「苦しい時の神頼み」の祈りぐらいしかでてこない。かといって、「心だに誠の道に叶いなば 祈らずとも神は護らん」などと呑気なことを言っただけはおれない。こうなると、とにもかくにも、全知・全能・全善といわれるキリスト教の神様にでも頼らうしかない。だが、その祈りも即効薬ではない。すぐには、なんの名案もできそうにない。迷案すらも。しばらく、途方にくれてぼうとしていた。この“ぼう”というのがよかったのが、そのとき、ふわっと頭に浮かんできたのが、多くの人に親しまれてきた日本の童謡「歌を忘れたカナリア」(西条八十作詞)であった。今では、もう懐かしのメロディの中に入るのだろうか、当時ではまだ新曲。とにかく、これでよしときめた。しかし、つぎは、それをフランス語に急いで訳すという大仕事。好きな詩であっただけに、暗記していたのは幸い。早速、「守護の天使」さんに、お願いして大方の意味を説明した。さすが詩人の彼は、私なりに満足する素晴らしい翻訳してくれた。当時は、今のような、ワープロもコンピューターもなく、昔のタイプライターでなんとかしあげてくれ、祝いの日ぎりぎりに間に合ってホッとした。

奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりパチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

- | | |
|--|--|
| 1. 歌を忘れた カナリアは
後ろの山に すてましょか
いえ いえ それはなりませぬ | 2. 歌を忘れた カナリアは
背戸の小數に らめましょか
いえ いえ それもなりませぬ |
| 3. 歌を忘れた カナリアは
柳の鞭で ぶちましょか
いえ いえ それはかわいそう | 4. 歌を忘れた カナリアは
象牙の船に 銀の權
月夜の海に 浮かべれば
忘れた歌を 思い出す |

上記の詩を日本語とフランス語で、丁寧に書きとめ、白い大きな包装紙に包んで、当日の祝いの折り、皆の前で荘厳に院長に無事進呈できた。

院長も名を知られた詩人であっただけに、大喜び。日本人からフランス語訳付きの日本の詩をもらうことは、またとないことだったのであろう。院長は立ったまま紙を手にして、その詩を静かに小声で読み終えると、一同に短い感謝の言葉をのべて式は結ばれ茶話会に入った。そこで、院長は私にひとつの質問をだしてきた。

「第一節から第三節までのことは分かるが、最後の第四節では、象牙の船に乗って月夜の海に浮かんだとき、そのカナリアは、忘れた歌を思い出したというけれど、そこに、どういう因果関係があったのか？説明してほしい」

褒められて少しいい気になっていた私は、不意を突かれたように、一瞬ギョツとした。言われてみれば、確かにそう。しかし、これは詩なのだから、物理学や哲学のような論理などはない。詩人の院長なら、もう少しロマンチックであればよいのに、と心の中で呟いたものの、悲しいかな、語学力の不足、淋しい苦笑いをして場を凌ぐしかなかった。そこに見られる正確な論理を得意とするフランス人の体質に対し、理論よりも詩的感性を好む日本人の私に



1952年 カルメル会修道院（タラスコン、フランス）にて

はまことにガッカリ。どちらかといえば、人間を中心におく西欧文化の自然観に対し、自然と人間の一体感を特色とする東洋的自然観、とくに、日本文化にあるその特質がはっきりと対照的にあらわれていた。地球規模で生きなければならぬ現代人類にとっては、このような文化の両面を活かす総合的人間観が今後の課題となるであろう。これも、前号に続く、フランスでのカルチャーショックの症例。

5. “動く”チーズ：小さくて大きな思い出

上記の院長にかかわるもう一つの小話。

私がフランスのカルメル会修道院に入ったのは、もうすでに、五十年近く前。当時のフランス料理といえば、世界一流であったが、修道院の食事ときては、そんなものは、凡そ縁遠い貧しさそのものであった。せめて高級料理とあまり変わらないものがあったとすれば、フランス人自慢のチーズぐらい。これだけは、フランス人の大好物で欠けることはなかった。

ところで、ある日のこと、デザートにチーズを食べようとすると、細くて白い小さな蛆が二匹、チーズの中から、体をくねらせながら出たり入ったりしている。いつか、台所の外の庇の下につるしてあったチーズ籠に黒い蠅がいっぱい集まっていたのを見てぞっとしたことがあった。それを思い出すと、なお一層気味が悪くなり舌も動かなくなってしまった。しかし、修道院では、出されたものは、なんでも食べてしまわなければならない、というきまり。私が、モジモジしていることに気付いた院長は、黙ったまま、私の方を見て軽く合図をした。お皿をもってそっと立っていくと、院長は、自分のデザートと皿ぐるみ取り換えてくれ、なにもなかったかのように、蛆のチーズをそのまま食べてしまった。私は驚いた。蛆を食べないですんだものも身も縮む思いだった。院長は、それこそ、チブスかなにか、お腹を壊してしまうのではないかと、本気で心配した。ともかく、夕食を終えて皆と一緒に修道院の中庭にでてくると、院長は、優しく微笑みながら、私に話しかけてきた。

「あなたは、どうして、あのチーズを食べなかったのですか？あのチーズはとてもおいしいのに！あれは、“動くチーズ”という

のですよ」と、さらっという院長の顔は天使のように爽やかであった。「動くチーズ」、ほんとにそんなものがあるのかどうか？今も半信半疑。まだ、辞書で確かめたこともない。しかし、そこで腹をこわそうと、そして死んでしまおうと、とにかく、私のために蛆のチーズをいかに美味しくそくに食べてくれた院長の勇気ある兄弟愛。小さな二匹の蛆虫との不幸な一時の出会いが、大きな愛を伝えてくれる人間との幸いな出会いとなることに眼を開かれた思いであった。

写真展のご案内

P.G.I. (虎ノ門)

9月16日(木)ー10月29日(金)
奥村光也 作品展
Mitsuya Okumura "Angle of Silence II"
11月8日(月)ー12月22日(水)
三好耕三 作品展「横丁」
Kozo Miyoshi "Neighborhood"



©Mitsuya Okumura
Bartlett Arboretum, Connecticut 1996

P.G.I. Shibaura (芝浦)

9月20日(月)ー10月30日(土)
普後均 作品展「見る人」
Hitoshi Fugo "Waterfall Watchers"
11月5日(金)ー12月18日(土)
森永純 作品展「波一海」
Jun Morinaga "Sea-on the Waves"



□ フォト・ギャラリー・インターナショナル(虎ノ門)
東京都港区虎ノ門 2-5-18 Tel. 03 3501 9123
月-金 11:00-19:00 土:日・祝 休館
地下鉄銀座線虎ノ門駅下車 2番出口より徒歩5分

□ P.G.I. 芝浦
東京都港区芝浦 4-12-32 Tel. 03 3455 7827
月-土 11:00-18:00 第2・4土、日、祝 休館
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分
ゆりかもめ 芝浦埠頭駅より徒歩15分

*表紙の写真

ロバート・バイヤース作品

[Weeds Against Old Car, Near Mariposa, California, 1994]

一見して、版画のような作品ですが、初冬の日差しに照らされて、枯れた雑草の影が印象的な構成です。おそらくオールドカーは放置されたらしく、ペイントが剥がれ、錆び付いていて、抽象的なイメージを与えます。この画面からはオールドカーの面影は想像できませんが、効果的な背景を成し、「栄枯盛衰」のことが思い浮かびます。

わが心の遍歴

(1)異文化との出会い

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子) /かわむら・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化学研究科教授として哲学、宗教学を教える。著書は『宗教学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教学』(新教出版社、'94)、『神と宗教学』(北樹出版、'94)、『キュルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

花岡永子先生は、「自己の生死の問題で先ずキリスト教に入信し、自己と根源的には全く一であるような他己の生死の問題で禪に参ずるようになった」と過去の書物の中で述べられている。また自らを「禪に生きながらのクリスチャン」とも言う。

禪の中に「師家」という言葉があり、辞書を引くと「学徳のある禅僧。特に、座禅の師をいう。ノ専門道場において参禅する者の指導にあたる僧で、正しい禪の伝統の法を継承する師について印可を得て、その法を嗣ぐ者でなければならない。一般に親しんで『老師』と呼ぶ」とある。1978年に禪の修行に入られた花岡先生は、女人禁制の相国寺僧堂での修行も、京大名誉教授、西谷啓治博士(漢醫老大師)の推薦により許可され、1987年印可証を授与され老師の資格を与えられた。女性の老師である。

現在は、大阪府立大学大学院で教鞭をとるかたわら、世界各国の大学、世界哲学会、東西宗教交流学会、国際神学会などに出席、数多くの講演をこなしておられる。禪に入る以前に20年間クリスチャンであり、禪の修行に入ってからさらに20年の月日を経てこられた先生に、ご自身の中での「キリスト教と仏教の出会い」をはじめとする様々な考察を、「わが心の遍歴」として8回にわたり寄稿していただくことになった。

* * *

1. H.ティーリク先生との出会い

1965年の初夏に、ドイツのハンブルクに今は亡き夫と2年程の予定で留学したが、様々な理由によって、結局は8年半もの年月をハンブルク大学で過ごすことになった。夫は日本学教室で働くかたわら、哲学科での研究を始めた。筆者の方は神学部の組織神学科で、日本での宗教学の研究を更に続けることにした。その1年前の1964年5月から9月まで、京大の文学部時代に筆者の主任教授であった西谷啓治先生(1900-1990)がハンブルク大学の客員教授であり、更に、京大の大学院文学研究科時代の筆者の主任教授であった武内義範先生も1964年にハンブルク大学にご滞在であった。その関係で、武内先生のご推薦状を頂いて、神学部では、H.ティーリク先生(1908-1986)のご指導を頂くことになった。

これは、筆者の将来を決定するような大きな出来事であった。

というのも、ティーリク先生は、学生時代は難病で車椅子で学校や大学に通われた方で、その上第二次世界大戦の間、大学での講義や旅行は勿論、キリスト教会での説教も禁止されていたにもかかわらず、命懸けで説教活動だけは続けられ、ヒットラーとの闘いを闘い抜いて来た方であり、大変な戦争体験をお持ちであったからであった。

2. 祖父の教育

筆者が両親の反対を押し切って宗教学の道を歩み始めたのは、第二次世界大戦の折りに疎開した長野県上田市での様々な体験やその後の日本の食料難や人心の乱れ、あるいは肺結核等との闘病生活の経験を経、あるいは、1950(昭和25)年に父の転勤でその後、7、8年住むことになる、初めて行った広島、原爆投下による焼け野原のままのむごい町の姿に接したからであった。第二次世界大戦がなかったならば、筆者はこのような厳しい学問の道に進むことは全く無かったであろう。

子供心に先ず思ったことは、人間は戦争を絶対にはしてはいけないということであった。戦争中であるにもかかわらず、医者であった祖父は、人間は敵であろうが味方であろうが怪我をした人々には医師として、差別なく治療しなければならぬことを色々の童話や、実話を通して教えてくれた。ドイツに医者として留学中に第一次世界大戦が勃発し、スパイと間違えられてスイスによって救われた祖父は、最後まで絶対平和主義者であった。筆者は祖父からのこのような教育を受けた結果、永世中立国のスイスが大好きであり、敵味方なく傷病兵たちを看護したナイチンゲールのお話忘れられない。

戦争を契機に知ったもう一つのことは、疎開先の上田市で経験した田舎の素晴らしさと、その素晴らしさにもかかわらず、幼子にも時々突如として襲ってくる文化への飢えであった。田舎は、本当に素晴らしかった。山の木々はいつも緑であり、川の水はい

つも清らかで、動物は自由に遊び、あちこちの木々には沢山の果物が色とりどりに実っていた。勿論、そこで、東京から疎開して生き続けることは容易ではなかった。荒地を開墾し、そこにカボチャやサツマイモや麦等々色々のを植えて命を繋いでいくことは、大変な労働を幼子の筆者にも課した。しかし、その合間に祖父が薪拾いを兼ねて連れていってくれた山々は、松風の吹く素晴らしい山々であった。幾度か道にも迷って、子供心にも夕暮れの山奥で命の危険を感じたこともあった。しかし、それでも山々の木々の上で、ターザンのように遊ぶのが、堪らなく爽快であった。けれども、田舎の文化は、戦中、戦後のこともあってか、幼子の心にも余りにも貧弱に思えた。

3. 文化への飢え

疎開先では、小学校に通う道は、2キロ余りの田圃道であった。その道は、学校の宿題に出された、食用のためのイナゴ100匹を採集するには都合がよかった。しかし、一面の田圃をみると、緑の美しさや黄金の実りの豊かさ、労働の報いの喜びだけではなく、文化の無さの悲しみが、ひしひしと胸を締め付けてくることをどうすることもできなかった。この悲しみを既に小学校1年生の登校時に味わっていた。敗戦後、命からがら満州から帰国してきた父は、単身赴任の東京の研究所から毎月少女向けの一冊の星の観察の本を送ってくれた。これが、教科書の他に読める唯一の本であった。これを毎月楽しみにして待ち、隅から隅まで何度も読んでいた。また、物々交換で全てのものを交換し果てて、何も無い部屋にたった一つ残されたピアノで練習し、1里離れた先生のところへレッスンを受けにゆくのが唯一の楽しみであった。が、これも過労で両肺の結核に倒れ、半年程絶対安静の床に伏し、ただ虚しい闘病生活を小学校5年生で経験することになってしまった。

田舎では、都会からの疎開者は厄介者のように見なされていた。なにしろ、鎌もよく使えないからだというのである。「都会の人々は、牛や豚のように肉を食べることもできないので、牛や豚以下の役立たずである」という言葉を田舎の人々が話し合っているのを見て、ショックを受けたこともあった。そんな折りも折り、病気の治らぬままで、父の転勤で広島に引越し、原爆の落ちた

後の焼け野原を見、大変なショックを受けながらも、開墾の重労働が無くなり、父を含めた家族全員で生きることの喜びのうちで、いつしか、病も治った。しかし、原爆で負傷した沢山のお友達や先生方と接することによって、原爆の恐ろしさや社会の矛盾に気づき始め、宗教哲学や神学を学ばなければどうにもならないような状況に、自覚しないままに近づいて行った。

4. H.ティーリケ先生の神学

ティーリケ先生は、先ずレッシングで博士の学位論文を書かれたことから分かるように、理性を重視しながら信仰を貫かれようとされた。従って、大学のゼミでも、種々の学部と合同ゼミを試みられた。例えば、神学部のゼミで心理学専攻の教授とその学生たちとの合同ゼミを、あるいは生物学研究室の教授とその学生たちとの合同ゼミを開催して、他領域を相互に学習するという仕方である。そして、その上で、神学の問題を考察されようと試みられた。この意味では、ティーリケ神学は、この世の出来事の次元である水平次元と神と人間の個人の自己との関係から成り立つ垂直次元との交錯するところで成り立っている神学であると言える。つまり、この世の出来事を理性で考察するレッシング的な立場と、神對自己の関係の中での信仰の立場との交錯するところで、ティーリケ神学が成り立っている。

ティーリケ先生は、かつて難病で治る希望のないことを知ったとき、そのままでは、大量の薬を一度に秘密で飲むことによって、生か死かを選ぼうとされた方であった。その結果、大量の薬のショックで難病が奇跡的に治ってしまわれた。先生は、世俗と信仰(プロテスタント)にいつも同時に生きようとされ、神学も両次元で成り立つ神学を模索されていた。従って、現代のどのような次元の問題にも、神学は答えることが出来なければならぬと考えていらした。

現代の非神話化の問題にも、神話を実存論的に解釈することによって信仰の真理を失ってしまう危険を冒すよりは、もう一度神話のレベルで神話の語らうとすることを理解すること(再神話化)を提案された。信仰のみならず、現実をも同時に重視するティーリケ先生の神学は、筆者に絶大なる影響を与えたのであった。

世界一大きな？ イースターエッグ

田沼 武能

(写真と文)



見渡すかぎりの大農場地帯である。中世以来の古い街道ぞいに、素朴なレストランが見つかる。人のよさそうな夫婦がもてなしてくれて、しかも都会ではまず味わえないフランス料理を堪能させてくれる。地ワインもおいしい。

そんなフランスの田舎を旅するのが私は好きだ。中でもブルゴーニュ地方は、中世からのロマネスク様式の大聖堂や修道院がいくつも保存されており、小さな教会まで入れると数えきれぬほどの文化遺産が今に息づく。

ブルゴーニュのブドウ畑は、中世の修道僧たちが自給自足のための財源に、斜面の荒地を開墾して、ワインの生産を始めたのがきっかけと聞く。今ではボルドーと肩を並べるフランスワインの生産地として名高い。

美酒の生まれるところに「よき食文化も発展」、文化全体も美しい。そんな三味一体の土地柄にぞっこんほれこんだ日本人がいる。佐多保彦さんである。

かつてのブルゴーニュ公国の首都であったディジョンから約50キロ西にシャイイの城がある。佐多さんはこのいわば「城主」となって、荒廃きっていた十六世紀のその城を修復した。往時をしのばせる姿に復元して、今はホテルとして再利用できるまでになった。

城主はこの地域の人と城が交流するよう「エッグフェスティバル」というのを企画した。まず高さ1メートル近くもある巨大なタマゴ型の石膏を百個庭に用

田沼武能 / たぬま・たけよし

写真家。1949年東京写真工業専門学校卒業後、木村伊兵衛氏に師事。芸術新潮嘱託、タイムライフ社嘱託を経て、'72年フリーに。'75年日本写真協会年度賞、'79年モービル児童文化賞、'85年第33回菊池賞、'90年紫綬褒章。日本写真家協会会長、東京工芸大学教授。著書は『アンデス賛歌』『世界の子供たちは今』『地球星の子どもたち』『戦後の子供たち』他多数。世界の子供の写真をライフワークとし、世界の平和と地球環境の保全を訴える。

意した。毎年春のイースターの季節に近在の子どもたちに呼びかけ、これに思い思いの絵を描いて楽しんでもらうのである。すでに11年目になるエッグフェスティバルは、幼稚園、小学校の子どもたちと親や先生たち、約300人が参加して、それぞれのグループごとに合作で絵を描いていく。幼稚園児にとっては自分の背丈より大きなタマゴに挑戦するのだ。指導の先生は下絵を用意して、他のチームに負けまいと指示する。先生や親の方が夢中になるのも世界共通ではばえましい。高学年の子となると、さすがに自分たちの自由に描いている。

会場はもう、ごったがえすような熱気で、さて描き終えた巨大タマゴは、すなわちエッグアートは、村のあちこちに置かれ、静かな村は春が集団でやってきたような華やぎとなる。集会場では、お菓子和ジュースがふるまわれ、子どもたちは大はしゃぎだ。

実はこのシャイイ村は、小学生が数人しかいない過疎村なのである。新しい城主は復活祭のエッグフェスティバルで城と村を復活させようと願っているように見うけられた。



ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいている
ブルゴーニュへいらっしやいませんか。
極上の銘酒を生み出すぶどう畑、
グルメレストランの数々、中世そのままの街なみ、
美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、
それがブルゴーニュです。

Château de Chailly / シャトー・ドゥ・シャイイ



お問い合わせ
(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087

オスピス・ド・ボーヌと ワイン・オークション

横山 弘和

世紀末、西暦1999年も残りわずかとなりました。大晦日の除夜の鐘を聞きながら、1000年に一度という年末の名残を惜しみ、迎える新年西暦2000年に希望を託す頃、おそらく巷では大勢の人々が、特別の想いでシャンパンや様々なワインの栓を抜き祝い合うことでしょう。考えてみますと、今年収穫されるワインが瓶詰めされ、ラベルに1900年代の文字が表示されるのはこれが最後になる訳です。この意味からすると、今年のワインは作柄の優劣以外でも、大きく注目されることになるのではないかと思います。ブルゴーニュ、オスピス・ド・ボーヌのワイン・オークションも盛大なものになるに違いありません。

本誌でもご紹介したことがあるように、ブルゴーニュでは毎年11月の第3土曜日から「栄光の3日間」が開かれます。1日目土曜日の夜は、シャトー・デュ・クロ・ド・ヴージョの大晩餐会（本誌23号）、3日目日曜日はポーレと呼ばれるムルソーの昼食会（同27号）、そして中の日曜日には、ブルゴーニュ地方の中心ボーヌの町で、ぶどうの収穫のお祭りや新酒のオークションが開かれ、世界中からやってくる大勢の人で賑わいます。人口わずか2万人ほどのこの小さな町は、このときばかりは車も閉め出され、中世の衣装をまとった人々の行列やブラスバンドで沸き返り、「栄光の3日間」にふさわしい雰囲気にあふれます。

ワイン関係の行事は世界各地にあります。そのどれよりも伝統があり、関心を集めているのが、このボーヌのワイン・オークションです。



ワイン・フェスティバルのバレード

15世紀にこの地方を統治していたブルゴーニュ大公の下で大法官を務めたニコラ・ロランとその妻ギユース・ド・サランは、1443年、病人と貧しい人々のためにオスピス・ド・ボーヌ（ボーヌ施療院）を作りました。この慈善救済院の運営を維持する目的で、市民が次々とぶどう畑を寄付し、そこで作られたワインをオークションにかけて運営資金を作り出すのです。1859年に初めてのオークションが行われて以来現在まで続く、伝統的な催しです。

正式にはL'HOTEL-DIEU・de・Beauneと呼ばれるこの慈善救済院が建てられた15世紀中頃、この地方の住民はたいへん貧しく、ブルゴーニュ全体で資産のある家族は24、あとはほとんど乞食同然であったと伝えられています。しかし、建物は純粋な中世ゴシック様式、屋根は明るい色のモザイク模様で葺かれ、フランダース芸術の傑作の一つとして美しく印象的です。院内のホール、教会、調理場、調葉室、大理石彫刻などはたいへん立派で、また「最後の審判」を描いた装飾屏風はロジェ・ヴァン・デル・ウェイデンの有名な作品です。ボーヌの中心の広場近くにあるこのオスピスは、同じ市内にあるブルゴーニュワイン博物館と共に人気の観光ルートになっており、毎日見学ができます。

オスピスが所有するぶどう畑は、主にコート・ド・ボーヌにあり、その起源は、慈善救済院の経営を助けようとするパン屋さんがぶどう畑を寄進した1459年にさかのぼります。その後次々と寄進者が増え、現在ぶどう畑は58ヘクタール。アロース・コルトン、サヴィニイ・レ・ボーヌ、ボマール、ヴォルネー、ムルソーなど、主にコート・ド・ボーヌの有名な村々に散在しています。1977年には初めて、コート・ド・ニュイからマジシャンベルタンが新しく寄進され、その後1990年に同じくコート・ド・ニュイからクロ・ド・ラ・ロッシュが加わりました。作られるワインの量は、年によってかなり異なりますが、1988年のように豊作のときは700樽（1樽から約300本）になります。また、このオークションでは15樽ほどの蒸留酒（ブランデーとマール）も競りにかけられます。

1988年筆者は、この土地の有力ワイン業者の



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在在叡多高会ヴィタリテ事業部在籍。

招きで、このオークションに参加しました。オークションの前日、オスピス所属の醸造所で、競売される新酒の公開試飲会がありました。次々と樽からくみ取り注いでくれるキュヴェの利き酒をしましたが、発酵を終えたばかりのワインはまだ濁っていて、味も酸っぱすぎず美味しくは感じられませんでした。それでも買い付けにきているバイヤーたちは、そのワインがいかに熟成してどんなワインになるか、この段階で判定できるらしく、オークションの参考にたと熟心にメモを取っていました。

そして、当日11月20日日曜日の午後、初回から数えて128回目のオークションが、ボーヌ市のホールを会場に始まりました。世界中から集まった大勢のワイン業者の中に、当時パブル景気たけなわの日本からの参加者も非常に多く、さすがに経済大国日本、と感心させられたものです。午後2時30分、報道陣やカメラマン、入場できなくてガラス越しに外からのぞき込む大勢の人々が見守るなか、当日の名譽ゲスト、ナポレオン3世の直系子孫にあたるプリンセス・ナポレオンの臨席を仰いで競売が開始されました。競売人の賑やかな掛け声で、一つの銘柄が競りにかけられる度に中央の壇上で小さなローソクに火が灯され、その灯が消えぬ内に競りが行われるという珍しい伝統的なやり方です。落札されるごとに落札社名と国名が発表されますが、日本とスイスが目立って多く感じられました。1988年のヴィンテージは過去10年間で最高との前評判から、落札価格も前年に比べ赤ワインが34%アップ、反面、白ワインは9%のダウンでした。これはそ



オスピス・ド・ボーヌ中庭



オークション風景(壇上前列中央の女性がプリンセス・ナボレオン)



特製ワインラベル



オークション参加者に配られるパンフレット

の年の赤ワインの出来がいかによかったかを物語っています。また、この回の大きな話題としては、カタログ外で出品された赤ワインで、ナボレオン妃殿下が名誉会員であるフランス赤十字社へ寄贈されたキュヴェ「ルイ・ベトー」が、1樽529万円と当日の最高値で大手ワイン・ドメーン、パトリアルシュ社によって落札されたことです。

また、例年高い値がつく白の特級「コルトン・シャルルマーニュ、フランソワーズ・ド・サラ」のときは、日本の有名洋酒メーカーとロバート・クラブ率いるイギリスのワインコレクターグループとの間で白熱した競り合いが繰り広げられました。会場全体が固唾を飲みながら、最後にイギリス側がこの素晴らしいワイン4樽を1310万円で落札。これは前年の倍の値がつく記録的なものでした。記者団の取材に答えてロバート・クラブは、「これでこんなよいワインをヨーロッパにとどめることができた」と満足そうにコメントし、暗に東洋からのバイヤーの買い漁りを皮肉っていました。

落札されたワインは、樽詰めのまま地元のワイン業者が引き取り、そのカーヴで保管熟成し、2-3年で瓶詰めしラベルを貼り、落札者の手元に届けてくれます。これらの手数料、運賃、税金などが加算されるため、ワインは最終的にかなり高いものになります。が、美しいデザインのラベルに、ワイン名、ぶどう畑の寄進者名、ヴィンテージ、そして落札者の名前(会社名)が表示されれば、慈善事業に寄与したという名誉と誇りをもって充分報われるのではないのでしょうか。

最後に、昨年1998年度、オスピス・ド・ボーンのオークションにかけられたすべてのワインの数量と価格をご紹介します。この年の総取引額は約5億4千万円(1FFr=22円)で、前年比12%アップとなりました。

第138回(1998年)	オスピス・ド・ボーンのワインリスト	寄進者名	数量(樽)	落札値 / 樽
(赤ワイン)				
BEAUNE	Cuvée Guigone-de-Salins	キュヴェ ゴゴネ・ド・サラン	26	35000F
VOLNAY	Cuvée Blondeau	キュヴェ ブロンドー	22	36000F
SAVIGNY-LES-BEAUNE	Cuvée Arthur Girard	キュヴェ アルテュー・ジラル	18	36000F
POMMARD	Cuvée Dames de la Charité	キュヴェ ダム・ド・ラ・シャリテ	17	43000F
CLOS DE LA ROCHE	Cuvée Cyrot-Chaudron	キュヴェ シロ・シヨウロン	2	93000F
CORTON	Cuvée Charlotte Dumay	キュヴェ シャルロット・デュメイ	30	51000F
BEAUNE	Cuvée Dames Hospitalières	キュヴェ ダム・ゾスピアリエール	20	42000F
VOLNAY SANTENOTS	Cuvée Gauvain	キュヴェ ゴウヴァン	14	45000F
BEAUNE	Cuvée Cyrot-Chaudron	キュヴェ シロ・シヨウロン	15	37000F
MAZIS-CHAMBERTIN	Cuvée Madeleine Collignon	キュヴェ マドレーヌ・コリニョン	12	83000F
BEAUNE	Cuvée Hugues et Louis Betault	キュヴェ ユーグ・ラモー・ラマロス	23	38000F
PERNAND-VERGELESSES	Cuvée Rameau-Lamarosse	キュヴェ ラモ・ラマロス	10	34000F
POMMARD	Cuvée Suzanne Chaudron	キュヴェ ズザンヌ・ショウロン	13	40000F
BEAUNE	Cuvée Maurice Drouhin	キュヴェ モーリス・ドゥルーアン	24	36000F
SAVIGNY-LES-BEAUNE	Cuvée Forneret	キュヴェ フォルネレ	12	34000F
BEAUNE	Cuvée Clos des Avaux	キュヴェ クロ・ダヴォ	20	39000F
POMMARD	Cuvée Billardet	キュヴェ ビルラデ	17	40000F
CORTON	Cuvée Docteur Peste	キュヴェ ドクター・ペスト	25	54000F
BEAUNE	Cuvée Nicolas Rolin	キュヴェ ニコラス・ロラン	28	36000F
POMMARD	Cuvée Raymond Cyrot	キュヴェ レイモン・シロ	15	40000F
SAVIGNY-LES-BEAUNE	Cuvée Fouquerand	キュヴェ フークラン	19	35000F
BEAUNE	Cuvée Rousseau-Deslandes	キュヴェ ルーゾウ・デザランド	28	35000F
MONTHÉLIE	Cuvée Lebelin	キュヴェ レーベル	9	33000F
AUXEY-DURESSES	Cuvée Boillot	キュヴェ ボワロ	8	30000F
VOLNAY	Cuvée Miteau	キュヴェ ミト	15	37000F
BEAUNE	Cuvée Brunet	キュヴェ ブリュネ	14	36000F
CLOS DE LA ROCHE	Cuvée Georges Kritter	キュヴェ ジョージャン・クリッテル	2	72000F
VOLNAY SANTENOTS	Cuvée Jehan de Massol	キュヴェ ジョアン・マルソール	15	39000F
(白ワイン)				
CORTON VERGENNES	Cuvée Paul Chanson	キュヴェ ポール・シャンソン	5	66000F
MÉURSAULT	Cuvée Humblot	キュヴェ アンブロ	7	56000F
MÉURSAULT GENEVRIÈRES	Cuvée Philippe-le-Bon	キュヴェ フィリップ・ル・ボン	6	67000F
MÉURSAULT CHARMES	Cuvée Grivault	キュヴェ グリヴォ	6	67000F
CORTON-CHARLEMAGNE	Cuvée François-de-Salins	キュヴェ フランソワ・ド・サラン	5	90000F
POUILLY-FUISSÉ	Cuvée François Poissard	キュヴェ フランソワ・ポワール	20	35000F
MÉURSAULT	Cuvée Loppin	キュヴェ ロパン	10	42000F
MÉURSAULT CHARMES	Cuvée Bahézre- de- Lanlay	キュヴェ バヘズレ・ド・ランレイ	15	54000F
BATARD- MONTRACHET	Cuvée Dames de Flandres	キュヴェ ダム・ド・フランドル	4	156000F
MÉURSAULT	Cuvée Goureau	キュヴェ ゴアール	8	46000F
MÉURSAULT GENEVRIÈRES	Cuvée Baudot	キュヴェ ボウド	18	57000F
			104	
			G.T. 577	